

第8回 夢を紡いだ外国航空会社

海外渡航が自由化された1964年以来、海外旅行市場の拡大と発展には、世界各国と日本を結ぶ外国航空会社も一定の役割を果たしてきました。特に、日本発航空座席の半分近くを供給してきたパンアメリカン航空やノースウエスト航空といった米国外航空会社は、渡航自由化前の時代から海外旅行への夢を育むなど、その貢献度は極めて大きかったようです。

海外旅行への憧れを演出したパンナム

1964年度『運輸白書』によると、1964年4月の渡航自由化から3カ月後の7月時点で、日本発着の国際航空路線で定期便を運航していた外国航空会社は18社で、日本航空と全日空も合わせた週間運航便数は160便でした。外国航空会社18社による運航便数は122便を数えており、日本発着の国際航空路線における外国航空会社の週間運航便数の比率は約76%にも達しています。

1966年8月にパンアメリカン航空に入社したガリレオジャパンの青山良信取締役総支配人は、「あの世界一周線があったからこそ、兼高かおるさんに『世界の旅』でさまざまな国に行っていたことができているのではないのでしょうか」と振り返っています。

「兼高さんの番組作りを手伝わせていただいた『ヒューショーショー』のデビッド・ジョーンズ極東地区広報担当支配人にとっては、パンナムを日本市場に知らしめると同時に、日本人旅行者の皆さんに海外への憧れを持っていただき、その後の飛躍的な海外旅行の発展への道筋づくりにパンナムとして貢献させていた大きく大きな仕事だっただろうと思います」

(青山総支配人)

その後も、日本へのジャンボ機初航を太平洋線で実現するなど、さまざまな話題を提供しながら海外旅行の発展を見守ってきたパンナムは、1986年2月、太平洋部門をユナイテッド航空に売却するという航空業界を震撼させた劇的なドラマを経て、成田空港からのラストフライトを迎えることになりました。

路線からの撤退は、1970年代後半から米国で進められた航空規制緩和と政策による業界再編という激動がもたらしたものでしたが、1990年代初めには、チーバガメントを目指す当時の米国政府によって、米国商務省観光局(USTTA)の廃局も決定。米国向け海外旅行需要の創出に大きな役割を果たしてきた航空会社と観光局が相次いで姿を消すことになったのです。

1992年から約16年間にわたってノースウエスト航空の副社長、日本統括社長などを務めた米国外務省駐日代表部の目代純代表は、「USTTAがなくなった後、ノースウエスト航空ではアクティブラメリカという米国への旅行を促進する活動を展開しました」と振り返っています。

「その後、米国と日本の双方の旅行業界関係者によるプロモーション組織としてビジットUSAが発足し、私が初代の会長を務めました。日本の旅行会社の皆さんに米国へ行っていたり、エアーラインとホテルが軸となり国立公園などのグステイネーション開発に積極的に取り組みました」(目代代表)

ノースウエスト航空は、関西国際空港が開港した1994年にはニューヨーク線を運休とし、ミネアポリスやデトロイト、シアトルなどのハブを中心とする路線運営に切り替えて、各ハブからの就航路線である中小都市での観光開発に力を入れています。「成熟化が進みつつあった日本の海外旅行市場に新しいデスクティネーションを紹介することで、需要の拡大にも一定の役割を果たすことになりました」(目代代表)



ガリレオジャパンの青山良信取締役総支配人



米国オレゴン州政府駐日代表部の目代純代表

また、外国航空会社による運航便数のうち、パンアメリカン航空が貨物便の5便も含めて26便、ノースウエスト航空が25便で、米国の航空会社2社による週間運航便数は51便に達し、外国航空会社による運航便数全体の4割以上に及んでいます。

さらに、航空会社別の運営路線を見ると、パンアメリカン航空の路線には「世界一周線」という区分があり、「サンフランシスコ〜ホノルル〜東京」線と「東京〜ロンドン〜ニューヨーク」線で、それぞれ週7便が運航されていました。

さらに、航空会社別の運営路線を見ると、パンアメリカン航空の路線には「世界一周線」という区分があり、「サンフランシスコ〜ホノルル〜東京」線と「東京〜ロンドン〜ニューヨーク」線で、それぞれ週7便が運航されていました。



成田空港でのパンナム機の雄姿 (写真提供= NAA)

目代代表は、「米国をはじめ外国の航空会社が多く座席を供給することで、レジャー需要だけでなくビジネス需要も含めて、日本の海外旅行市場の拡大に貢献してきました」と語り、その役割の大きさを強調しています。

日本人海外旅行者が1000万人を突破した当時、ノースウエスト航空の日本人旅客数は100万人を数えていたと言います。